



マンダラとはなにか（福田）

マンダラとはなにか

福田亮成

一、マンダラの語義

マンダラ (maṇḍala) という言葉を直接日本語に置き換えることは、大変にむずかしい。訳語を一つにきめて、そのように統一してしまうと、この語が有する他の多くの意味を捨象してしまうからである。であるから、その語が使はれる場面によって、その訳語を決定していくよりしょうがないのである。

マンダラのマンダ (maṇḍa) とは、牛乳を攪拌することによって、ヨーグルトや、バター、チーズ等の乳製品が作られていくのであるが、その最も深い味をマンダというのである。例へば、『大乘理趣六波羅蜜經』（般若訳）では、それらを、乳・酪・生蘇・熟蘇・醍醐として、五味を数えあげている。まさしく、その醍醐味こそがマンダというわけである。即ち、エッセンスという意味が最も直接的なそれであろう。

さらに『大日經』の注釈書である『大日經疏』巻第四のなかに、マンダラという語の深釈をしている。それをあげてみよう。

又、漫荼羅は是れ《輪円》^{りんねん}の義なり。今、既に名数を限局す。理に於て未だ円^{いま まどか}ならざるに似たり。故にまた此の中の漫荼羅は、「是れ何の義とせんか」と問うなり。凡そ二の問あり。世尊の答の中に、初めには名を答え、次には義を答う。名を答うの中に就きて、還復本旨を申べ明して云はく、夫れ漫荼羅とは是れ《發生》^{またまた}の義なり。今、即ち名づけて發生諸仏漫荼羅とす。菩提心の種子を一切智の心地の中に下して、潤すに大悲の水を以てし、照らすに大慧の日を以てし、鼓つに大方便の風を以てし、凝えざるに大空の空を以てし、能く不思議法性の芽を次第に滋長せしむ。乃至、法界に彌満し、仏の樹王を成ず、故に《發生》^{びまん}を以て称す。夫れ雷雨の解を作すに甲

マンダラとはなにか（福田）

の^き くる者に随いて先ず^{かもく}萌ず。卉木の滋榮の性分は、等しからざるを以て^{つい}遂に平分の施をして亦限量を成さしむ^べ可からず。

次に義を答うる中に、梵音^{ぼんのん}の漫茶羅は是れ乳^{にゅうらく}酪^{さんよう}を攪^そ揺^うして蘇^そを成ずの義なり。漫茶羅とは、是れ蘇^その中に、極めて精^{せい}醇^{じゅん}なる者の浮^うかび^{あつま}聚^{あつま}りて上に在る義なり。彼の精醇なるものは復た^{へん}変^{へん}易^{やく}せざるによりて、復た名ずけて堅とす。淨妙の味のみ、共に相和合して、余物の雑^{まじ}はること能わざる所なり、故に《聚^{じゅう}集^{しゅう}》の義あり、是の故に仏、《極無比味》、《無過上味》を説きて漫茶羅とすと言う。三種の祕密方便を以て、衆生の仏性の乳^{さんよう}を攪^そ揺^うして、乃至、五味を経歴して、妙覺の醍醐^{じゅんじょうゆみょう}を成じ、醇^{じゅん}淨^{じょう}融^ゆ妙^{みょう}にして復た増す可からず、一切の金剛智印は同共に集会して、真常不變の甘露味の中に於て、最も第一たり、是れを漫茶羅の義とす。

とあるのがそれである。これによってマンダラという語の意味するものが理解されたであろう。

さらには、僧侶が戒を授かる場所を《戒壇》というが、その壇もマンダラの訳語の一つである。仏壇もまさしくそれであろう。また《道場》という言葉の訳語であるということができるであろう。釈尊が悟りを開かれた場所を菩提道場とか、菩提座とか云はれるが、まさしくボーディマンダ（Bodhi-maṇḍa）の訳語である。よくテレビの劇映画で、終了した時に《完》という字が出てくるが、それもそうであろう。昔のマンガに《大団円》という言葉で終章がくくられたが、まさしくマンダラという意味を表現したものである。

町の喫茶店にマンダラという店があったが、そこの主人のいわく、サークル・仲間の意味だという。仲間の集まる店という意図だとのことであった。

二、礼拝の対象としてのマンダラ

仏教における礼拝の対象とは、仏陀そのものであろう。大乘仏教の展開は、多くの礼拝対象を生みだしたと云うことができよう。修行の結果として仏^{ほうしん}となった報身としての仏、即ち歴史上の仏陀釈尊。その報身としての釈尊を仏

陀たらしめた仏、即ち法身^{ほっしん}としての仏陀。さらに誓願をかざし、人々の救済におもむく応身^{おうじん}としての菩薩達というごとき三身の仏陀を生み出したのである。

さらに『牟梨曼陀羅呪経』（失訳）によれば、仏陀を中心尊として左右に両脇士を配する三尊形式による仏陀の表現があらわれてくる。その左右の両脇士とは、金剛を手にする金剛手菩薩と、蓮花を手にする蓮花手菩薩のことである。中心の仏陀は種々に変化してゆくのである。そして、金剛とは智慧の象徴であり、蓮花とは慈悲の象徴である。蓮花は汚泥に根をはり美しい花を咲かせるが、その花は決して汚泥に汚されることがないということを菩薩の実践になぞらえているのである。菩薩の実践とは慈悲の発露ということである。このことは、仏とはなにか、と問うて、その内容を智慧と慈悲と解したことからの展開であるにちがいない。

密教の時代に入って、これらの諸仏菩薩が三部族に分類されるようになるが、まさしく、仏部・金剛部・蓮花部ということである。部族とはクラ（kula）の訳語であるが、族という意味でもある。密教の重要な経典の一つである『大毘盧遮那神変加持経』（略称『大日経』）に基づく胎蔵界（生）マンダラの中央には、この三部族の諸尊が配置されていることに注目すべきであろう。

仏を礼拝するということが、仏陀の三尊形式を生み出し、やがて胎蔵界マンダラに結実していることを考えるべきであろう。

三、法身仏としての大日如来

密教というものの最大の特徴をあげるとするならば、教主法身大日如来の登場ではなかろうか。法身大日如来の特性には二つの方向性があるであろう。その一つは、諸仏菩薩を統一する主体としての大日如来であり。もう一つのそれは、全ての諸仏菩薩を各々の場所に位置づける大日如来である。云ってみるならば、後者は金剛界マンダラ上の大日如来であり、前者は胎蔵界マンダラ上の大日如来であろう。さらに重ねて云うならば、金剛界のそれは智慧の主体者であり、胎蔵界のそれは慈悲の主体者としての大日如来と云うことができるのではなかろうか。

マンダラとはなにか（福田）

このように、統一の主体者としての、そして全ての諸仏菩薩としての具現者としての大日如来ということは、中国密教から弘法大師空海において論じられている四種法身説を生み出したのであった。即ち、全ての諸仏菩薩の各々は、法身大日如来の一つのあらわれということであろう。例へば、観音菩薩は一つの誓願をかざして応現したわけであるが、それはとりもなをさず、法身大日如来の一分の徳を担っているということである。法身大日如来はこれら一つ一つの誓願、即ち一つ一つの徳を全てに内包している主体ということになる。不動明は不動明王ながらに法身大日如来ということである。

弘法大師空海は、このことに関して次のごとくに述べている。

問う、『経』にいわく、釈迦すなわち毘盧遮那^{びるしやな}なり、と。その心い
かん。答う、たとえば数穴ある闇屋に燈を燃すとき、諸穴俱時に光
を放つがごとし、

と。〈数穴ある闇屋〉とは、立方体に円や、三角、四角などの形をした孔^{あな}を
穿^{うが}つことと考える。その闇屋たる立方体の中に燈を燃したとすれば、それら穿^{うが}つた孔^{あな}から各々の形をした光が外にもれ出るにちがいない。その燈の
本体が大日如来とするならば、円や、三角、四角等の光線そのものは諸仏菩薩
ということになり、それら全ては大日如来にほかならないことになろう。
マンダラ図を立方体と観念するならば、それらのことが了解できるであろう。

四、無礙^{むげ}なる世界

マンダラ図を通して私達は、一は多に、多は一に相互関係を有しているとい
うことを視覚的に了解することができたはずである。よく經典^{たとえ}に喩として
登場してくる〈帝網〉、即ち帝釈天の住む宮殿にかかっている網、網とい
うものの道理として、網とは多くの結び目によって成立^{なりた}っている。であるから、
どこの結び目を取ったとしても、それは同時に全ての結び目に関係を持
っていることになる。例へば、一つの結び目をつき出したとして、その時全
ての結び目は従^{じゅう}ということになる。次の瞬間に隣りの結び目をつき出した
とすれば、前の瞬間につき出した結び目は従となり、全ては相互に主となり、

マンドラとはなにか（福田）

従となるはずである。これは、仏菩薩の世界のみの道理ではなく、私達生きる世界もまったく同一であるといわなければならない。ここで注意すべきは、この道理は静止した世界ではなく、諸仏菩薩の世界でいうならば、誓願をかざして応現してゆく行動の中でのそれであり、私達人間の世界でいうならば、自己の目的を貫徹しようとして努力している場でのそれである。

現代社会は、個の独立を願うあまり、多くの人々が孤独である。いや、孤立していると云ってもよい。家というものが崩壊しているといわれて久しい。経済的に一つの家から独立してゆくことが容易となっているようである。しかし、精神的な独立が、はたして、ともなっているのであるか疑問視せざるをえない。

私達一人一人の行為が、もし悪であったならば、地球上の全ての人類に影響を及ぼすものであり、もし善であったならば、同じように全ての人々にかかわってゆくことの道理を知るべきであろう。

(2002. 1. 19)